

## 破壊された肉体との遭遇の意味——タナハシ・コーツ『世界と僕のあいだに』におけるアメリカ黒人を巡る考察について

本田 安都子

### 1.

2012年2月にフロリダ州で発生した黒人少年トレイヴオン・マーティン(Trayvon Martin)射殺事件は、アメリカ社会に大きな衝撃を与えた。一つには、丸腰であったこの17歳の少年を射殺した加害者ジョージ・ジーマーマン(George Zimmerman)に対し、同州の定める正当防衛法に基づいて翌2013年7月に無罪判決が下されたことにある。また同時に、アフリカ系アメリカ人コミュニティでは、この事件は、他のコミュニティとは異なる響きをもって受け止められるべき悲劇として捉えられていた。そのことは、ジーマーマンの判決を受けて行われたバラク・オバマの談話の中に端的に見られる。

トレイヴオン・マーティン射殺事件が起こった当初、(私に息子がいたとしたら)これは私の息子に起こりえたことかもしれないと言いました。別の言い方をすれば、トトレイヴオン・マーティンは、35年前の私だったかもしれないということです。すくなくとも、アフリカ系アメリカ人のコミュニティにおいて、なぜ、この事件を嘆き悲しむ声が大きいのかを考える際、彼らが、特定の経験や決して消えることのないある歴史を通して、この問題を見ているからなのだと理解することが大切であると私は考えます。<sup>1</sup>

その「特定の経験」の例としてオバマは、デパートでの買い物中に警備員につけまわされたり、エレベーターに同乗した見知らぬ女性が緊張の面持ちを見せたりするなどといった、自ら体験した事柄をいくつか挙げている。つまりそれは、その肌の色ゆえに、周りから「犯罪者予備軍」として警戒のまなざしを向けられるという経験のことを指している。このオバマの発言の重要性は、約一世紀前にW.E.B デュボイスが提唱した、アメリカ黒人社会の向上を率いるべき「有能なる十分の一」の一つの到達点ともいうべき「黒人初の大統領」が、その肌の色のために「犯罪者予備軍」と目されたという、現在のアメリカに未だに蔓延る人種偏見の一端を見せているところにある。

トレイヴォン・マーティン事件の後も、同種の事件は後を絶たない。特に、警察による黒人男性への暴力事件の報道が続いている。そのような、公権力による黒人への暴力という問題が取りざたされる中、2015年7月に発表された、タナハシ・コーツ (Ta-Nehisi Coates) による『世界と僕のあいだに』 (*Between the World and Me*) は、全米で大きな反響を呼ぶ一冊となった。ミチコ・カクタニ (Michiko Kakutani) がニューヨーク・タイムズ紙において、「現在のアメリカにおいて、黒人であることの意味を探る、身を焦がすような一考察」と評するように、14歳の息子に向けて書いた手紙という形式をとる同書の中で、コーツは一貫して、「黒人大統領」が二度も選ばれることとなった現代のアメリカにおいて、黒人の肉体を持つとはどういうことなのか、そして、その肉体が破壊されるとはどういうことなのか問い続ける。その問いの背景には、昨今特に注目を浴びることとなった、権力機構による黒人への「不当な」暴力事件の多発が存在する。2014年ミズーリ州ファーガソンにて、18歳の黒人青年マイケル・ブラウン (Michael Brown) を射殺した警官が不起訴になったことを知り、言い知れない衝撃を受ける息子サモリ (Samori) に対し、コーツは「アメリカでは、黒人の肉体の破壊は伝統だ。それは『世襲財産』<sup>ヘリテージ</sup>なんだよ」(120) と説く。コーツにとって、警官による一連の暴力事件とは、決して偶発的なものではなく、奴隷制以来連綿と続く、制度的な黒人の身体破壊というアメリカの「伝統」の中に位置づけられるべき出来事なのだ。

このように、「黒人初の大統領」を誕生させたアメリカ社会の中に、依然として存在する人種問題を告発する『世界と僕のあいだに』は、発表以来多くの称賛の声を呼んできた。なかでもトニ・モリソン (Toni Morrison) による「ジェイムズ・ボールドウィンが亡くなって以来、私の悩みとなっていた知的空白を埋めてくれるのは、誰なのだろうか」とずっと問い続けてきた。明らかにそれは、タナハシ・コーツである」(qtd. Wallace-Wells) という賛辞は、同書の重要性を語る上でよく引用される一節である。多くの評者がコーツとジェイムズ・ボールドウィン (James Baldwin) の比較をする所以は、1963年に出版されたボールドウィンの随筆本『次は火だ』 (*The Fire Next Time*) との類似性にある。<sup>2</sup> 『次は火だ』は、甥に向けた手紙という形式を使いつつ、ネーション・オブ・イスラム (Nation of Islam) の台頭により、その亀裂が修復不可能なまでに広がっていくアメリカの人種対立について考察している。

モリソンのように、ボールドウィンを引き合いに出してコーツを称賛する声がある一方、コーネル・ウェスト (Cornel West) は、コーツの書における政治

的運動への消極的姿勢を指摘し、ボールドウィンとの類似性を一蹴する——「ボールドウィンによる痛みを伴う自己省察は、人々を動員し、社会運動への注目を集めることとなった。… Courts の恐怖に突き動かされた自己陶醉は、個人への逃避と安全地帯への逃亡に行きつく」。『次は火だ』は、冒頭の 10 ページ程を占める手紙の部分において、黒人を抑圧し続けながらも無実を装う白人を、それでも兄弟とみなし、「私たちが、愛の力で、わが兄弟たちが自分の本当の姿を見ることが出来るように、現実逃避をやめるよう力を尽くし、変革へと踏み出さなくてはならないんだ」(9) と 15 歳の甥に訴えた後、残りの 90 頁余りにおける人種関係への考察を述べる部分では、民族主義的ネーション・オブ・イスラムへと黒人大衆がひきつけられていく現状を冷静に分析した後、読者であろう白人リベラル層に向かって「次に来るのは炎だ！」(106) という警告のひとことを投げかけて終わる。確かに、ボールドウィンの語り口からは、自らの言葉を使い、人種問題の解消に向けて現実へと働きかけようとするさまが見取れる。そのようなボールドウィンの言葉を、「僕は自分たちが連中を止められるとは思っていない。…お前の闘争で連中を変えようなんて思っていないよ」(172) と息子に語りかける Courts の言葉を並べてみると、本書における Courts の「悲観的」姿勢が際立ち、現実介入への「及び腰」を指摘する West の批判にも一理あるかのように見える。<sup>3</sup>

では、タナハシ自身は、そのように肯定的にも否定的にもなされるボールドウィンとの比較についてどう思っているのか。ガーディアン紙でのインタビューにおいてこの件に触れ、自分とボールドウィンに類似性があるとすれば、それは政治的な観点からではなく、文学的な観点からだと彼は述べている——「彼(ボールドウィン)が言っているようなことを言っていますよね、って言われるんだけど、そうじゃないんです。少なくとも、ボールドウィンに影響されたのは、そういうところではないんです。どちらかと言えば、(影響を受けた点は、)ボールドウィンは、この世界について何か大切なことを言うのなら、美しく言うのが一番なんだ、ということを知っていた、という点ですね。…つまり、表現の仕方によって、言わんとすることに、より深い意味を持たせることが出来るんだ、ということなんです」(Adams)。ジャーナリストとして名を成した Courts ではあるが、彼は若いころから詩を書いていた。<sup>4</sup>『世界と僕のあいだに』でも、自身の青年期の知的成熟の軌跡を語る部分において、詩作について語っている——「詩は真実をむだなく表そうとする…詩は概念を転写しただけのものではなかった…詩作とは、正当化という鋳造がそぎ落とされ僕が冷徹な鋼鉄

のような真実を得るまで、自分の思考を加工することだった。…こうした真実は黒人の肉体をスローガンの先へと運んでゆき、色彩や質感を与え(62-63)。もし本書が、コーツの述べているような「文学的」創作として意図されているのであれば、そこで明示的に語られる「政治性」によってだけではなく、彼が「黒人であることの意味」を語る際の「文学的」意匠によっても、その真価を問われるべきではないだろうか。

事実、『世界と僕のあいだに』という題名は、その題辞で使用されているリチャード・ライト (Richard Wright) による同名の詩に由来している。名の知れない語り手が、ある朝偶然にも“the thing”と詩中で形容される死体に遭遇するという、題辞の引用部分で描かれる光景は、『世界と僕のあいだに』が追及するテーマと呼応する。それは、「得体のしれない暴力」にさらされた黒人の肉体との突然の遭遇である。一つには、コーツの息子サモリがメディアなどを介して、警官による「不当な」暴力行為によって殺される黒人青少年の死を目撃する。また他方では、コーツ自身が、同じく警察暴力によって引き起こされた、大学時代の友人プリンス・ジョーンズ (Prince Jones) の死に遭遇する。父と息子、どちらの場合でもその死との遭遇は突然であり、暴力的なまでに不条理なものとして体験される。コーツは、息子との世代間の差による感覚や経験の違いを度々指摘してはいるが(「お前の人生は僕自身の人生とはあまりに違いすぎる。…黒人の大統領がいて、ソーシャルネットワークがあつて、メディアがどこにでもあつて、そこらじゅうの黒人女性がナチュラルな髪で通す世界で育つことが何を意味するのか、僕にはわからない」(26))、この不条理な死との遭遇という点では経験を一つにしている。この点に着目した際、『世界と僕のあいだに』の創作において、引用されたライトの詩の一節が、単なるインスピレーション以上の重要性を持っていることが推察される。

本稿では、上記のライトの詩と『世界と僕のあいだに』における「死との遭遇」というモチーフとの関連性を踏まえ、本書でコーツが語る「黒人であることの意味」について考察する。具体的には、ライトの詩で描かれる“the thing”——白人によるリンチによって殺された黒人の死体——とそれに遭遇する無名の——おそらくは黒人であろう——語り手との関係が、『世界と僕のあいだに』における黒人の死とそれに遭遇するコーツ親子との関係にどのように反映されているのか、さらには、コーツはそれをどのように改変しているのか見ていく。

## 2.

ライトの詩“Between the World and Me”は、5つの連から構成されている。ある朝、森の中で無名の語り手が、リンチで焼死させられた黒人の人骨に遭遇する場面から始まり、やがては、その死に取りつかれるかのように殺された黒人と同一化し、最後には、自らが冒頭で遭遇した“the thing”——「モノ」——となって終わる。内容に関してはそのように要約できるが、実は、語り手が遭遇した「死体」と思しき「モノ」が黒人の死体なのか、更には、それが白人によるリンチによるものなのか、客観的な事実は何一つとして提示されていない。ただ確実なのは、「わたし」が森の中を歩いていたら、ある「モノ」に躓いたということだけなのだ。しかし、その正体不明の遭遇の直後、「その場面の煤けたひとつひとつの事柄が立ち上り、わたしと世界の間を割って入った」(“And the sooty details of the scene rose, thrusting / themselves between the world and me”) (Wright and Fabre 246) という語り手の言葉をきっかけに、第二連以降では、夢とも現実ともつかない光景が描かれていく。

読者の多くは、これが白人による黒人のリンチについて描いた詩であると容易に推測するであろう。しかしながら、先にも述べたとおり、この「モノ」と呼ばれる人骨が黒人のものであるかどうか、その死が白人によってもたらされたのかどうか決定づける客観的証拠は一切ない。あるのは人骨や焼け焦げた木や血の付いた服などだけで、多分に不確実な状況証拠だけなのだ。ここで重要なのは、この詩が、リンチというアメリカの人種関係を考えるうえで非常に重要なテーマを扱う際に、犯人不在の殺人現場を出発点に物語を始めているという点にある。

『世界と僕のあいだに』においてコーツは、この「犯人不在の殺人」こそ、アメリカの人種主義に欠かせない構成要素だと主張する。アメリカ人が暗黙の裡に受け入れている観念の一つとして、コーツは「自然」としての「人種」という概念を挙げ、そのような考えの延長線上に「人種主義」が配置されていることを指摘する。

アメリカ人は、定義された、疑いようのない自然界の特徴としての「人種<sup>レイス</sup>」というものが実在すると信じている。この状況は変わらないし、そこから「人種主義<sup>レインズム</sup>」も必然的に生じてくるのさ。人種主義っていうのは、消せない特徴のあるグループ特有のものとし、その後でその人々を辱め、見下し、破壊したいという欲求のことだよ。こうして、人種主義は「母なる自然<sup>マザーネイチャー</sup>」

の「無垢の娘」とみなされ、みんなは「中間航路」や「涙の旅路」について、まるで地震や竜巻と同じように自然現象として嘆くしかなくなるのさ。  
(10)

「人種」というのは生物学的に決定された区分であり、ゆえに、その区分に従って分けられたグループ間の優劣に従い抑圧や殺戮が起こるのは、自然の摂理に従ったまでのことである——そのような考えに基づけば、白人の黒人に対する優位性が疑われることのない状況下では、リンチ殺人ですらも正当化され、無残に引き裂かれた黒人の肉体の残骸は、雷に打たれた焼け焦げた樹木と何ら変わらないものとなる。それに呼応するかのように、ライトの詩の第二連目は、まるで自然災害後の焼野原を描写しているかののように、リンチの犯行現場を描写する。淡々と続く情景描写の中で、殺された者と自然とが混然一体となっていくさまが見て取れる。

There was a design of white bones slumbering forgottenly  
upon a cushion of ashes.

There was a charred stump of a sapling pointing a blunt  
finger accusingly at the sky.

There were torn tree limbs, tiny veins of burnt leaves, and  
a scorched coil of greasy hemp;

A vacant shoe, an empty tie, a ripped shirt, a lonely hat,  
and a pair of trousers stiff with black blood.

打ち捨てられたように眠る白い骨があった  
灰の山の上に。

焼け焦げた若木の切株が突き立てていた  
糾弾の指先を空に向けて。

裂け目の出来た枝や焦げた葉っぱの細かい葉脈、そして、  
焦げた油っぽい麻ひもの輪っかがあった。

脱ぎ捨てられた靴、締める人のいないネクタイ、引き裂かれたシャツ、打ち捨てられた帽子

そして、黒い血で固まったズボン。

(Wright and Fabre 246)

時折はさまれる“finger” や“limbs” そして “veins” といった身体を連想させる単語によって、殺された人間の影をかすかに感じ取ることが出来るが、持ち主不在の衣服の描写に至って、その所有者の不在が際立つこととなる。この第二連目では、殺された者だけではなく、殺した者の存在も「マッチの燃えカス」 (“dead matches”) や「飲み干されて空になったジンのフラスコ」 (“a drained gin-flask”) (Wright and Fabre 246) などといったモノの描写に置き換えられている。リンチという残虐事件の行為者の存在は消え去り、その行為の受け手である加害者の存在も、「白い骨」という「モノ」としてしか残らない。コートは、黒人とは「主体性を奪われた存在にされた人間」(67) に与えられた名前だと述べているが、まさにこの第二連目はそういった「オブジェクト」にされた黒人の姿を描いている。さらには、犯罪行為の「主体」であるところの白人の姿も消え去っている。ポールドウィンは、『次は火だ』において人種差別行為について語る際、「無実こそが、その罪の本質なのだ」(6) と述べているが、ライトの詩の犯行者たちについても、その行為を立証できるだけの証拠の存在は認めることが出来ず、うまく罪から逃げおおせることに成功している。第一連目の「わたし」の目の前に出現したのは、そのような「自然現象」としての人種主義による惨事の痕跡なのだ。

第三連目以降に描かれるのは、その惨事の痕跡に恐怖で凍りついた「わたし」が、リンチで殺された黒人の亡霊に憑りつかれていくさまである。朝であったはずの光景は、突如、闇に包まれ、語り手は地に足をつかまれる。やがて、目の前の白い骨が自分の肉体へと溶けていき、「わたし」はその骨が生前に経験したであろうリンチの場面を追体験することとなる。やはりここでもリンチの行為者の存在は曖昧模糊としており、代わりに前面に現れるのは、リンチの炎による「わたし」の苦悶の様子である。もだえ苦しみ、救いを求めて死の脇腹をつかんだ「わたし」は、最終的に、朝日を見つめる白い骨——冒頭に登場する「モノ」——となって終わる——「今やわたしは乾いた骨となり、その顔は石のような頭蓋骨となり、黄色い驚きに包まれながら、朝日を見つめている」 (“Now I am dry bones and my face a stony skull staring in/yellow surprise at the sun”) (Wright and Fabre 247)。リンチの死に憑りつかれた語り手が死と同一化するこの最終行において、時制が現在形に代わることにより、その憑りつかれた状態が永続することが示唆される。死に憑りつかれたことにより、「わたし」は行為主体として動くことも、生命体として時間の流れの中に身を置くこともできない、まさに「オブジェクト」となってしまったことが時制の変化

によって示されているのだ。このような、「憑りつかれた場所としてのリンチ場面 (“the site of lynching as a haunted place”）」(Pinckney) は、二重の意味において、「わたし」にとっての脅威の場として機能しているとジョゼフ・ラムジー (Joseph Ramsey) は指摘する。一つには、一つ間違えば自分も目の前の死体同様の目に遭いうるという脅威であり、それゆえに「わたし」はその「モノ」との同一化の幻想にいとまたやすく陥ってしまう。もう一つは、最終行で示唆されるように、死者と同一化することによって、「生きた眼が骸骨の空っぽの眼窩に置き換えられてしまう」(Ramsey) 危険性、つまりは、死の恐怖に憑りつかれるあまり、思考停止に陥ってしまう危険にさらされる場ということであり、事実この詩は、「わたし」が動きも思考も剥奪された「モノ」の状態となって終わる。

このように、ライトの詩は、リンチ事件をまるで自然災害のように描くことにより、人種隔離政策下のアメリカにおいて、自身の肉体に対する自由を奪われた黒人の状況を描き出す。さらには、そのような抵抗不可能に見える死に遭遇し、肉体を奪われる恐怖に憑りつかれるあまり、自ら「オブジェクト」になってしまう黒人の無力感をも読む者に訴えかける。

### 3.

『世界と僕のあいだに』は、戦後の公民権運動を経て、黒人大統領が二度も選出されるまでに至った現代のアメリカにおいて、ライトの詩の中で描かれる、それに遭遇した者に亡霊のように憑りつく黒人の死と、いかに対峙すべきなのかという問いを探求する試みであると言える。評者の中には、この何十年かの間に成し遂げられた「前進」を無視する傾向にあるとして、コーツを批判する声もある (Kakutani)。しかしながら、公民権運動やオバマという「前進」の象徴の存在があるからこそ、世界と自分との間に突如として入り込む「亡霊」との対峙は、何よりも重要な課題なのだというゆるぎない主張が、コーツの語りからは読み取れる。そしてその課題の重要性は、黒人大統領が当たり前存在する時代に育つ息子サモリの存在ゆえに、否応なしに高まる。なぜなら、国家の最高権力者の座に「黒人」が就くという、ある種の「達成」がなされることにより、人々の行為——それが暴力の行使であろうと、暴力の被害者になることであろうとも——の原因は、肌の色の問題ではなく、個人の問題に帰せられるべき時代が到来したという幻想が受け入れやすくなりうるからだ。そのような状況下では、ライトの描くような「死との遭遇」の様相は、当然ながら違ったものとなる。

本書の中で展開される、『僕の肉体を失う』とは何を意味して」いるのか(8)という問いに関するコーツの考察が、いまだアフリカ系アメリカ人コミュニティを襲い続ける貧困や暴力の問題を、個人や家庭の問題に帰す「カラー・ブラインドネス」の議論への反論として意図されているのは明らかである。そのような「カラー・ブラインドネス」の側からの批判として、例えば、人種主義による黒人への抑圧という議論を振りかざすあまり、コーツは、「白人」たちの間の個別性を無視し、人種差別的な行動をとった人物の個人的な道徳的欠陥——例えば、コーツの息子を押しした白人の女性（コーツ 109-110）は、白人の子どもにも同じことをしたであろう——という可能性を意図的に排除している、とリッチ・ロウリー（Rich Lowry）は主張する。同様の議論を黒人の側にも適用するロウリーは、「黒人たちが貧困から逃れたいのならば、（政府による援助プログラムだけではなく）成功するための個人的な資質も必要だ」と述べ、さらには、アジア系移民を引合いにだし、「彼らも偏見にさらされたが、家族や教育の力でそれを乗り越えた」と締めくくる。ロウリーの提起する議論によれば、黒人が自分の「肉体を失う」のは、各個人の道徳的腐敗や貧困、家族問題、そして低レベルの教育の結果ということになる。<sup>5</sup>そして、「トレイヴォン・マーティンのパーカーが彼を殺した」、あるいは、「しつけをする父親がいればよかったんだ」（コーツ 150）という声が、当然のものとして受け止められることとなる。

そのような議論への反論としてコーツが掲げるのが、「自分は白人だと信じている者たち」(9)という概念である。この考えでは、人種を生物学的事実としてとらえるのではなく、「ヒエラルキーの問題」(10)としてとらえ、アメリカ人という新しい人民になる者は、黒人という「底辺」(122)という存在をつくりだすことによって、自らを漂白して「白人」となり、自由と民主主義を享受することができるようになる。多様な背景を持つ他国の人民たちが、アメリカ人という新たな人民になることは、自らを白くすること、つまり、黒くないということを示すことであり、それは、黒人の肉体への暴力と搾取によって行われたのだとコーツは述べる。<sup>6</sup>

彼らの得た新しい名称「人民」には、犯罪的な権力という構造から切り離してしまおうと、実質的な意味がない。…異なるいくつもの種族<sup>トライブ</sup>を洗って白くするプロセスや、白人であるという信条を高揚させることは…次のような行為を通じて達成されたということだ。そもそもがお前や僕の「自分た

ちの肉体を守り支配する権利」を否定しようとして行われたことだが、生命・自由・労働・土地の略奪、背中をむち打つこと、手足を鎖でつなぐこと、反逆者の絞首、家族の解体、母親たちの凌辱<sup>レイプ</sup>、子供たちの売却——他にもあるがさまざまな行為を通じてだよ。(10-11)

コーツは、2014年に『アトランティック』誌上にて発表したルポルタージュ“*The Case for Reparations*”において、このように黒人を「底辺」に押しとどめる搾取的な行いが、決して過去の遺物などではないことを論じている。奴隷制時代から始まり、戦後以降も続いたアメリカの人種差別的政策の系譜をたどるこの記事において、コーツは、1930年代から60年代にかけて行われた人種差別的住宅政策についての調査報告をしている。例えば、1934年に創設された連邦住宅局は、住宅ローン補助の対象地域のランク付けをする際、そこに黒人が住んでいるかどうかを一つの基準としていた。黒人が住んでいない地域には高い格付けがなされ、逆に、黒人が一家族でも住んでいる地域は低い格付けとなった。よって、黒人が越してくることはその地域の「格」を落とすこととなり、当然、不動産業者は黒人家族の締め出しを図った。黒人以外の住宅購入希望者が政府の補助を受けて、アメリカン・ドリームの象徴とも言える、マイホームを手に入れることが叶う一方で、政府の住宅ローン補助プログラムから締め出された黒人家庭には、不当なローン契約を民間業者と結んでまでしてマイホームを手に入れるしか道はなかった。コーツは、南部からの「大移動」で北部の都市部にやって来た勤勉な黒人労働者たちが、政府による差別的住宅政策の影響によって、白人家庭と比べて、驚くほど経済的に苦しい生活を強いられてきた歴史をつまびらかにする。<sup>7</sup>

“*The Case for Reparations*”においてコーツは、データや歴史的事実の積み重ねというジャーナリスティックな言語を使いつつ、いかにしてアメリカの「自分は白人だと信じている者たち」の生活が、黒人を「底辺」に押しとどめることで成り立っているかを論じている。他方で、『世界と僕のあいだに』では、より主観的な言語を用いて同じ事柄について語っている——ライトの詩で使われた、亡霊としてのリンチ死体というモチーフを使って。黒人コミュニティに蔓延る暴力について語る際、コーツはそれを個人の問題に帰すような議論を打ち消し、代わりに、「自分は白人だと信じている者たち」が「底辺」の黒人たちへふるってきた暴力の残像への恐怖こそが、その問題の源泉にあるのだと説く。

ボルチモアでの少年時代を回想しながら、独特のファッションやマナーを誇示し、粗野な言葉や行動で相手を威圧することに熱心だったストリートの黒人少年たちも、ライトの詩の語り手同様、すでにそこにはいない、無残にも殺された黒人の亡霊の影響下にいたのだとコーツは述べる。

今あの少年たちのことを思い返すと、僕には恐怖しか見えないし、彼らは過去のつらい時代の亡霊から自分たちの身を守っていたことがよくわかるよ。ぶら下げた黒人の肉体に火をつけ、切り刻めるように、ミシシッピ州の暴徒が彼らの祖父たちを取り囲んだ時代のことだ。その恐怖は、彼らの熟練しているバップ、だぶだぶのデニム、ぶかぶかのTシャツ、野球帽の計算された傾げ方<sup>かし</sup>のなかに染みついていた——どれもこれもが、俺たちや望むものは何でもちゃんと持ってるんだぜという思いを高めるために、この少年たちがとり入れた行動や装いのカタログだったんだよ。(18-19)

ライトの語り手が、恐怖のあまり「モノ」となり下がった哀れな黒人の死体と同化してしまう一方で、コーツの描くストリートの少年たちは、同じく恐怖に駆られながらも、それと同化してしまうのではなく、自身の服装や身振りによって、自分がすべてをコントロールしているのだという感覚を何とかして持つことにより、リンチの群衆に焼かれ、切り刻まれた黒人の死体との距離を取ろうとする。また、恐怖を源泉とする暴力は、ストリートのみならず家庭の中にもあったのだとコーツは述べる。外の世界——ドラッグや銃撃事件、刑務所など——によって、いとも容易く子供を奪われるかもしれないという不安と常に隣り合わせで暮らしていた黒人の親たちは、いつ何時その肉体が破壊されるか分からないという教訓を教えるために、子供たちに暴力をふるったという——「父さんは本当にひどく恐れていた…父さんは怒りというより不安に駆られてベルトを使った。父さんは誰かが僕を盗んでいってしまうと思ってでもいるように僕を打った」(20)。

コーツは、そのような「亡霊」が自分たちと「世界」との間に差し挟む恐怖によって支配されていたボルチモアの子ども時代の環境を指して、「肉体の安全を守ることに躍起となる文化」(30)と表現している。そして、そのような文化が醸成されたコミュニティの姿は、コーツが指摘する戦後の人種差別的な諸制度の存在を考慮に入れれば、1930年代にライトが描いた、死の恐怖に凍りつく語り手の生きる環境からは、さほど程遠くないところにあることが容易に想像

できる。

では、コーツの息子サモリはどのような空間に住まい、「亡霊」とどのように向き合うのか。コーツ自身は、自分やストリートの黒人少年たちと同様に、サモリも「この国の他の誰よりも破壊されやすい肉体の持ち主」(156-57)であると確信しているようだ。その確信は、大学時代の友人プリンス・ジョーンズが、何の咎もなく警官によって不当に射殺され、さらにはその犯人は正当防衛を理由に、罪をとがめられることなく職務に復帰したという事件に影響されている。シェアクロッパーの娘として生まれたプリンスの母メイブル・ジョーンズ (Mable Jones) は、医師として働きながら子供たちを育て、今では富裕層が住む「ゲーテッドコミュニティ」(154) に居を構える、成功した黒人の典型例と言える。しかし、そのような卓越した黒人の息子であるプリンスも「破壊されやすい肉体の持ち主」であることを若き日のコーツはこの事件で思い知らされる。プリンスの死を知らされた日のことを、コーツは次のように振り返る——「はっきり思い出せるのは、その時感じたことだ。怒りと、ウェストボルチモアの持っていた『引力』だった…プリンス・ジョーンズはそれを乗り越えたというのに、連中は彼の命を奪った」(90)。どれだけ社会的上昇を遂げようとも、その者を一瞬のうちに「破壊されやすい肉体」の現実へと引き戻す力を目の当たりにしたコーツは、19世紀のサウスカロライナ出身の政治家ジョン・C・カルフーン (John C. Calhoun) による「社会は富める者と貧しき者に大別されるのではない。白人と黒人に大別されるのだ」(コーツ 121) という言葉に首肯せざるを得なくなる。

しかしながら、「人種」というカテゴリーを「階級」というカテゴリーを飲み込むほどに強力なものとして描くコーツの姿勢に対して、疑問の声を投げかける評者もいる。ジョゼフ・ラムジーは、『世界と僕のあいだに』で描かれる「モノ」——黒人の死——に遭遇し、戸惑うサモリという象徴的なイメージは、サモリ自身がいまだ世界を十分に知らないナイーブな少年という立場ゆえに、人種に関係なく、マイケル・ブラウンらの不当な死に衝撃を受けた人々が共感しうるものとして開かれた、多くの可能性を秘めるものであると評価する一方で、同書に登場する「破壊された黒人の肉体」というイメージに関しては、貧困地域出身のブラウンと中産階級出身のプリンス・ジョーンズをいっしょくたにしてしまうなど、本来であれば社会階層的に多様性のあるアフリカ系アメリカ人コミュニティの姿を見えなくさせる危険を冒していると指摘している。

確かに、人種と階級の関係は一筋縄ではいかず、どちらか一方が他方を包摂

すると考えるより、コーツが明らかにした、戦前から戦後にかけて行われた差別的住宅政策の実体からも明らかなように、両者は共犯関係にあると考えた方が妥当であろう。それにもかかわらず、コーツが階級を包摂するカテゴリーとして人種を語るのであれば、そこには特別な意図があると推察せざるを得ない。その答えを探るためには、プリンスという破壊された黒人の死に遭遇したコーツの前に立ち現れたものとは何であったのか考える必要がある。この死には、もはやライトの詩で示唆されるような、人種差別主義者の「白人」は関わっていない。プリンスを殺したのは黒人の警官であり、その警官が勤めるプリンス・ジョージズ (PG) 郡の警察署は裕福な黒人が住む地域にあり、彼らが選んだ政治家が PG 郡の警察を監督していた。コーツにとって、「ほかの誰にも負けず、自分の肉体を支配しているように見えた」(63) 黒人たちの住む地域を守る黒人の警官が、プリンスの肉体を破壊したのだ。コーツが調査したところ、PG 郡の住人たちは、今ある快適な暮らしを守るためであれば、「刑務所が林立するのを正当化し、ゲットーや公営住宅プロジェクトの存在を支持し、黒人の肉体の破壊は秩序維持の副産物だとみなす」(98) ような、漂白された黒人たち——「自分は白人だと信じている者たち」——であった。ここに至り、ライトの詩で描かれていた、白人による人種主義の暴力によって「モノ」となった黒人の死体と、それに憑りつかれる黒人という図式は崩れ、目撃者の位置に立つコーツは、「白人」となった黒人たちの安全のために用意された権力によって殺された黒人の死に向き合うこととなったのだ。その時、世界とコーツのあいだに立ち現れるのは、無実を気取る白人たちの暴力とそれへの恐怖ではなく、「無実を気取る白人」には、誰でも——誰よりも破壊されやすい肉体を有する黒人ですらも——なれるという、人種問題が「前進」したかのように見える現代だからこそ存在しうる、新たな「真実」だと言えよう。

そのように考えると、黒人の死に遭遇したサモリは、どのような立場にいる人物と考えればよいのか。一つには、ライトの語り手同様、突然の遭遇に驚き、その死と同一化するような立場に彼もいる、と考えられるだろう。コーツは、サモリとの世代や育った環境の違いに触れつつも、息子も一連の黒人青年の殺害事件を見聞きすることで、アメリカ黒人の肉体の破壊されやすさに、ひいては、自身の肉体も危険にさらされうることを理解しているのだという確信を示す言葉を発している——「お前は『樹上限界』ツリーラインの上にある素晴らしい生活をもうじっくりと見ているけど、それにもかかわらず自分とトレイヴォン・マーテ

インのあいだに本質的な距離がないことも理解してる。だからトレイヴォン・マーティンの一件は、僕にはうかがえないくらい強烈におまえを怖がらせたにちがいない。連中に肉体を破壊されるときに失われるものを、お前は、僕よりずっと多く知っているのさ」(30-31)。しかし同時に、サモリによる現実の把握の度合いが不十分である可能性も指摘している——「お前はまだお前自身の神話、お前自身の物語に取り組んでいないし、僕らの周りのいたるところで略奪が行われていることにも気づいていないんだよ」(27)。言い換えれば、サモリは、殺された黒人の死体に遭遇しても、ライトの語り手のような、死に至るほど切実な自己同一化もしなければ、その遭遇の意味にたどり着くこともできない可能性を秘めているということである。それは必ずしも、サモリ個人の落ち度とは限らない。コートツは将来、サモリが受けるかもしれない周りの人間からの影響についてこう語っている。

ぼくは考えていたものだ。お前もやがて一人前の男になるが、僕には、お前と将来の仲間や同僚とのあいだの埋めがたい隔たりから、お前を助けてやることはできまい、ってね。将来の仲間や同僚はお前にこう信じこませようとするんじゃないかな、ってね——僕の知っているすべてのことも、ここでお前と交わしているすべてのことも、単なる妄想だよとか、あるいはまじめに議論する必要のないしょせん遠い過去のことさ、ってぐあいにね。(105)

ここで示唆されているのは、破壊された肉体の亡霊に憑りつかれる恐怖とは異なる、「カラー・ブラインドネス」の時代に起こりうる新たな恐怖と言える。つまり、ライトの語り手が恐怖のあまり凍りつき、やがては自ら「オブジェクト」となってしまう状況とは別の、新たな思考停止の状況に陥るという恐怖である。トレッシー・マクミラン・コットム (Tressie McMillan Cottom) は、コートツが息子の肉体の破壊を恐れると同時に、サモリが「忘れる」ことをも心配しているのではないかとの指摘をしている。「忘れる」とは、「自分は白人だと信じている者たち」の特徴だと言える。彼らは、自らを漂白してアメリカ人民となる過程で起こった掠奪や抑圧の事実を忘れることにより、自らの地位に付随する特権を罪の意識もなく享受することが出来るようになる。彼らの「無垢」を保つためには、「忘れる」ことは必須条件とも言える。ゆえにコートツは、息子サモリが自分は白人であるという幻想から「目覚めた市民」(125)となるよう、黒人

コミュニティの中の多様性に目をつむるという危険を冒してまでして、破壊された黒人の肉体と己との繋がりを、強迫観念的なまでに繰り返しサモリの脳裏に想起させようとしているのではないだろうか。

#### 4.

以上、リチャード・ライトの詩における「死との遭遇」というモチーフを手掛かりに、タナハシ・コートツが『世界と僕のあいだに』において展開する、「黒人であることの意味」について考察してきた。数十年という時代の隔たりがありつつも、破壊される黒人の肉体や、それに憑りつかれおびえる黒人の視点は、ライトの詩にもコートツの書籍にも共通していることが確かめられた。しかしながら、コートツの描く世界には、ライトの詩の世界からの逸脱も見られた。それは、黒人であることが必ずしも、ある朝、突然に遭遇する「モノ」との同一化も、その「モノ」の意味の把握も保証しない時代に至ったことを示唆している。だからこそコートツは、自分たちの肉体の破壊されやすさを懸命に息子に伝えようとする。ニューヨーク・タイムズ紙とのインタビューにおいて、コートツは、「僕は、人種主義を手で触って感じることでできるもの、感覚に直接訴えかけるものにしたかったんだ…それがその本質だからね」(Schuessler)と語っているが、それは、ライトの語り手が自ら死体と同一化することによって体験する恐怖を、言葉を介して追体験させる試みと言えよう。人種主義とは、「理屈抜き体験であり、脳を打ち砕き、気道を塞ぎ、筋肉を引き裂き、臓器を引き抜き、骨を砕き、歯を折ることで」あり、「絶対にそこから目をそらしてはいけないよ」と、コートツは息子に訴えかける(13)。その生々しい理屈抜きの現実を直視することは、世界と自分のあいだに忍び寄る、得体の知れない混沌の意味を探る旅への重要な第一歩なのだろう。

#### 註

- 1 『世界と僕のあいだに』以外の本文中における引用の和訳は、すべて拙訳である。
- 2 ボールドウィンとの類似性に関しては、Dysonを参照のこと。
- 3 ウェストと同じく、本書に見られる社会運動による変革への懐疑の姿勢を批判する論の例としては、Alexander, "Ta-Nehisi Coates's 'Between the World and Me'"を参照のこと。しかしながら、コートツの他の著作からは現実への働きかけの姿勢が十分に見て取れる。例えば、“The Case for Reparations”が挙げられる。奴隷制以来続く人種差別的措置に対する黒人への補償を求めるという趣旨のこの記事は、南部での人種隔離政策や戦後も続いた人種差別的住宅ローン政策の実体をつまびらか

にすることで、奴隷制の遺産が身近な過去にまで影を落とし続けてきた事実を明らかにしている。デイヴィッド・フラム (David Frum) など、黒人への金銭的補償の実行不可能性を指摘する声が多い中、コーツの意図は、実行可能性の問題よりも、ボールドウィンも主張する「白人に現実を直視するよう促す」という点にあることが同論の終りで示唆されている——「アフリカ系アメリカ人に与えられる小切手よりも重要なのは、補償の支払いとは、アメリカが自らの無実を信じるという幼年期の神話から脱し、その建国者にふさわしい知恵に達するという成熟を遂げた証しとなるのです」。

- 4 ルース・グラハム (Ruth Graham) とのインタビューにおいてコーツは、詩作と『世界と僕のあいだに』との関連性に触れ、同書では、抒情性や主題の繰り返しなど、詩作の訓練で培った技巧を取り入れたと述べている。
- 5 同様の議論は、オバマが黒人コミュニティへ語りかける際にも見られたことをコーツは指摘している。コーツは、オバマは「全アメリカ」にとっての大統領かもしれないが、「アメリカ黒人」にとっては、非常に口やかましい叱り屋でもあると述べ、黒人コミュニティを訪れた際にオバマが述べた言葉——黒人少年たちにはしかなるべき父親像が欠如している、コミュニティの問題は、政府による努力だけでは不十分で、親たちや教師など、コミュニティー丸となって取り組むことも必要など——を引用し、同じような趣旨のことを、問題を抱えた白人の子どもたちに向かっても言うだろうか、と疑問を投げかけている (“How the Obama Administration Talks to Black America”)。
- 6 このようなアメリカの「白人性」の構築の議論は、今となってはさほど目新しいものではない。例えば、19世紀に隆盛を極めた minstrel show には、アイルランド系移民など差別的待遇を受けていたヨーロッパ移民が、「白人」というアイデンティティを獲得するためにあえて顔を黒く塗る——ブラックフェイスの下で「白い顔」を際立たせる——という側面があったことがよく指摘されている (大和田 16-24)。
- 7 ミシェル・アレクサンダー (Michelle Alexander) は、『新たなるジム・クロウ』(*The New Jim Crow*) において、司法制度が新たな人種差別的機構となって黒人コミュニティを抑圧する現状について論じている。同様の問題を扱ったドキュメンタリー映画として、『13th—憲法修正第十三条』(13<sup>th</sup>) を参照のこと。

#### 引用文献

- Adams, Tim. “How Ta-Nehisi Coates’s Letter to His Son about Being Black in America Became a Bestseller.” *The Guardian*. Guardian Media Group, 20 Sept.

2015. Web. 8 Dec. 2016.

Alexander, Michelle. *The New Jim Crow: Mass Incarceration in the Age of Colorblindness*. New York: New Press, 2012. Print.

---. "Ta-Nehisi Coates's 'Between the World and Me'." *New York Times*. New York Times, 17 Aug. 2015. Web. 23 Nov. 2016.

Baldwin, James. *The Fire Next Time*. Kindle ed., Knopf Doubleday, 2013.

Coates, Ta-Nehisi. *Between the World and Me*. Melbourne: Text Publishing, 2015. Print.

---. "The Case for Reparations." *The Atlantic.com*. Atlantic Monthly Group, June 2014. Web. 23 Nov. 2016.

---. "How the Obama Administration Talks to Black America." *The Atlantic.com*. Atlantic Monthly Group, 20 May 2013. Web. 17 Feb. 2017.

Cottom, Tressie McMillan. "Between the World and Me Book Club: Two Texts Masquerading as One." *The Atlantic.com*. Atlantic Monthly Group, 20 July 2015. Web. 24 Dec. 2016.

Dyson, Michael Eric. "Between the World and Me: Baldwin's Heir?" *The Atlantic.com*. Atlantic Monthly Group, 23 July 2015. Web. 23 Nov. 2016.

Frum, David. "The Impossibility of Reparations." *The Atlantic.com*. Atlantic Monthly Group, 3 June 2014. Web. 1 Mar. 2017.

Graham, Ruth. "Poetic Training." *Poetry Foundation.com*. The Poetry Foundation. Web. 17 Feb. 2017.

Kakutani, Michiko. "Review: In 'Between the World and Me', Ta-Nehisi Coates Delivers a Searing Dispatch to His Son." *New York Times*. New York Times, 9 July 2015. Web. 24 Dec. 2016.

Lowry, Rich. "The Toxic World-View of Ta-Nehisi Coates." *Politico Magazine*. Politico, 22 July 2015. Web. 17 Feb. 2017.

Obama, Barack. "Remarks by the President on Trayvon Martin." *The White House: President Barack Obama*. 19 July 2013. Web. 1 Mar. 2017.

Pickney, Darryl. "The Anger of Ta-Nehisi Coates." *The New York Review of Books*. NYREV, 11 Feb. 2016. Web. 15 Nov. 2016.

Ramsey, Joseph G. "The Petrified and the Proletarian (Part 1)." *Red Wedge*. 28 Dec. 2015. Web. 15 Nov. 2016.

Schuessler, Jennifer. "Ta-Nehisi Coates's 'Visceral' Take on Being Black in America." *New York Times*. New York Times, 17 July 2015. Web. 8 Dec. 2016.

Wallace-Wells, Benjamin. "The Hard Truths of Ta-Nehisi Coates." *NY Mag.com*. New

York Media, 12 July 2015. Web. 23 Nov. 2016.

West, Cornel. "In Defense of James Baldwin." *Facebook*. 16 July 2015. Web. 23 Nov. 2016.

Wright, Ellen and Michel Fabre, eds. *Richard Wright Reader*. New York: Harper, 1978. Print.

13th. Dir. Ava DuVernay. Netflix, 2016. *Netflix*. Web. 1 Feb. 2017.

大和田俊之. 『アメリカ音楽史——ミンストレル・ショウ、ブルースからヒップホップまで』 講談社、2011年.

コーツ、タナハシ. 『世界と僕のあいだに』 池田年穂訳. 慶応義塾大学出版会、2017年.